通信かほくがた　vol.26-4
発行／NPO法人河北潟湖沼研究所
2021年5月15日

かほくがた

とりもどそう！　河北潟
泳げる湖、おいしい魚、安心して使える水

写真：筑後川

CONTENTS

九州「筑後川」流域視察報告　1p
河北潟の仲間たち・59
「タナゴ」　2p
琵琶湖視察報告　3p
“いい川”づくり研修会石川・河北潟　4p
河北潟湖沼研究所潜入記②　6p
コウノトリ人工巣塔、観察会報告　8p

九州「筑後川」流域の取り組みを視察

筑後川は九州北部の熊本・大分・福岡・佐賀の4県を流れ有明海に注ぐ一級河川です。この筑後川において流域の取り組みがおこなわれていることから、メンバー4名で視察訪問し、筑後川ブランド委員会事務局の藤谷 岳さん（久留米大学経済学部文化経済学科准教授）にお話を伺いました。流域の豊かな自然と文化を残していくために、そこで育まれた魅力的な商品を、市民参加投票によってブランド認定するしくみの「筑後川ブランド大会」、その運営や経緯についてお聞きしました。2016年度から工夫を重ねて開催されており、投票方法はネット、各地に設置された投票箱、オンライン総選挙と多くの方が投票できる体制がつくられ、投票数も増えたとのことです。また、久留米大学の学生さんが主体的に参加しており、この取り組みに関わりたいと希望入学する学生さんもみられるそうです。商品の取材、記事や動画作成などを学生さんがチームで担当し、学生と流域の人たちが刺激しあいながら取り組むことができ、多くの方が関わることで発展していく素晴らしい仕組みだと思いました。

その後はレンタカーで筑後川を上流から河口の有明海まで周遊し、国土交通省の筑後川防災施設「くるめウス」に立ち寄った際には、管理団体のＮＰＯ法人筑後川流域連携倶楽部の方とお話しできました。流域、自然、歴史、防災について理解を深めることのできる丁寧な館内展示と、同法人が発行する筑後川新聞はとても参考になりました。流域の人たちの交流を重視した新聞の良さが伝わり、河北潟流域新聞を作ろうと話をしながら、筑後川を後にしました。（文：川原奈苗）

第59回 タナゴ

今回は、コイ科タナゴ亜科の淡水魚の総称としての「タナゴ」を取り上げます。

一見してフナによく似ていますが、よく見るとフナよりは臀鰭が広く、体も平べったく華奢な感じがします。鱗がたいへん美しく、特にオスは婚姻色が鮮やかです。特徴的な生態として、長い産卵管で淡水生の大型二枚貝類の殻内に産卵すること、孵化した仔魚がしばらく二枚貝の体内で生活することが挙げられます。

もともとタナゴは「たびら」といい、「田の平たい魚」という意味です。湖沼や河川などの広い水域だけでなく、田んぼの水路やため池にも生息しています。身近な魚として釣の対象魚ともなっています。一方で、江戸時代は上流階級の趣味とされ、現在も高価な釣り竿も使われることも少なくなく、タナゴ釣りは高級な趣味としても知られています。しかし、多くの人にとっては、釣りよりもたも網で捕獲することが多い魚です。昔は網で捕獲して佃煮などにして食べられていたようです。現在では食用としては、ほぼ使われていません。

姿の美しさから鑑賞魚としても、よく飼育されています。小さく飼いやすい割に見栄えが良いことから、初心者にも好まれます。同時に、希少な種も多く、地域で保護活動が盛んな魚種の１つです。いろいろな意味で人との関係の深い魚です。

日本には、タナゴ亜科が3属18種生息していますが、河北潟ではタイリクバラタナゴ、ヤリタナゴ、ミナミアカヒレタビラ、イチモンジタナゴの4種が確認されています。

タイリクバラタナゴは中国大陸原産の外来種ですが、河北潟では一番多くいるタナゴです。体高が高く平べったい魚です。オスの婚姻色はバラ色に例えられますが、虹色の複雑な光沢があり、たいへん見栄えのする魚です。

ヤリタナゴは、やや大きめのタナゴで、体型はややずんぐりでしっかりした感じがします。オスの婚姻色は鮮やかですが、すこしどぎつい感じがします。河北潟本湖からは確認されず、河北潟につながる水路から見つかっています。目立つ口ひげがあります。

ミナミアカヒレタビラは、最近になってから河北潟で生息していることが分かった魚で、生息数は多くありません。あまり平べったくない種で、オスの臀鰭の婚姻色が目立ちます。

イチモンジタナゴは、90年代には確認されていましたが、その後河北潟からは消滅してしまったようです。もともと琵琶湖・淀川水系に生息する種で、河北潟では国内移入種となります。個人的には、とてもスマートでエレガントなタナゴで、いなくなってしまったことはすこし残念です。（文：高橋　久）

滋賀県琵琶湖視察　2021年2月19日、20日

2月19日～20日、滋賀県へ視察に行ってきました。日本一大きな湖、琵琶湖での環境保全活動について学ぶためです。19日は滋賀県庁を訪問し、琵琶湖保全再生課にてお話を伺いました。

琵琶湖でも河北潟同様、外来植物が問題となっています。琵琶湖で問題となっているのは主にオオバナミズキンバイ、ナガエツルノゲイトウです。葉や茎の断片から増えるほど繁殖力が強く、群落になると水面を広く覆ってしまい、船が航行できなくなる、定置網を倒す等、漁業に大きな影響があります。また農地に侵入し、農業へ大きな影響を与えることもあります。このような外来植物に、滋賀県が行っている対策をお聞きしました。

滋賀県では年に一度、生育状況の調査を行い、その結果に基づいて、駆除計画を立てています。情報は、地元のNPOや漁協、行政等が入った琵琶湖外来水生植物対策協議会で共有しています。実際の駆除活動では、機械での大規模な除去と、人力で細かく丁寧に除去する方法を組み合わせ、除去しています。どちらか一方の方法だけではなく、組み合わせることでうまく進んでいるとのことでした。また駆除活動の後は必ず再生があるので、それを前提に必ずアフターケアも行っているそうです。このような取り組みを平成26年から続けてきており、今年度、大規模群落はなくなったとのことでした。

琵琶湖では水辺の植物を活用した堆肥や文具等、水辺の資源を利用した商品のブランド化等もすすめています。資源として水草を見ると、外来植物は本来ないものであり、駆除活動をすすめていることから資源として永続性はなく、また堆肥にしたときに生えてくるリスクがあります。資源として長く使える可能性は在来の植物の方が高く、滋賀県では、商品開発については在来植物を活用したものに力を注いでもらっているそうです。商品は堆肥の他にヨシのチップや、ハガキ、布マスク等色々なものがありました。堆肥はデザインも固定され、付加価値のついた琵琶湖の製品として認知されていて、水辺の資源活用のモデルになるものでした。

20日は午前に琵琶湖博物館を視察し、午後はシンポジウム「ヨシの未来を考える」に参加しました。ヨシを活用した商品・簀戸（すど）のお話や、琵琶湖流域で企業や学生が参加している水辺保全活動等についての話をお聞きしました。

琵琶湖の自然環境、保全の取り組み、水辺の植物を活用した製品について等、幅広く学ぶことができました。（文：番匠尚子）

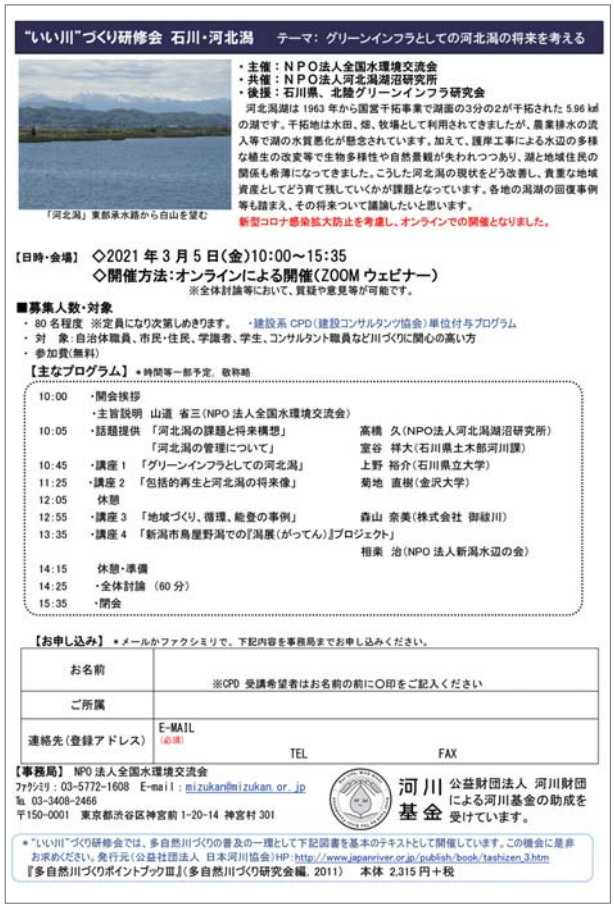
“いい川”づくり研修会 石川・河北潟

テーマ：グリーンインフラとしての河北潟の将来を考える

NPO法人全国水環境交流会が主催する“いい川”づくり研修会が、2021年3月5日に河北潟で開催されました。当団体は共催団体として準備にあたりました。コロナ禍にあり開催方法を検討した結果、オンラインを主体にサテライト会場を設置しての開催に至りました。“いい川”づくり研修会としては初めてのオンライン開催とのことで、当団体としても参加者100名規模のオンライン開催は初めてでしたが、トラブルもなく盛況に終えることができました。

“いい川”づくり研修会について

全国水環境交流会は、健全な水循環の保全・回復のためには、様々な人が交流するコミュニケーションの場が重要との認識のもと、緩やかな全国ネットワークとして1993年に結成され、“いい川”づくり研修会は、河川及びその流域の環境保全、回復に関わる人材育成のため、2012年度より約40箇所の地域で開催されてきました。



“いい川”づくり研修会 石川・河北潟　テーマ：グリーンインフラとしての河北潟の将来を考える

「河北潟」東部承水路から白山を望む

・主催：NPO法人全国水環境交流会
・共催：NPO法人河北潟湖沼研究所
・後援：石川県、北陸グリーンインフラ研究会

河北潟湖は 1963 年から国営干拓事業で湖面の3分の2が干拓された 5.96 ㎢の湖です。干拓地は水田、畑、牧場として利用されてきましたが、農業排水の流入等で湖の水質悪化が懸念されています。加えて、護岸工事による水辺の多様な植生の改変等で生物多様性や自然景観が失われつつあり、湖と地域住民の関係も希薄になってきました。こうした河北潟の現状をどう改善し、貴重な地域資産としてどう育て残していくかが課題となっています。各地の潟湖の回復事例等も踏まえ、その将来ついて議論したいと思います。

新型コロナ感染拡大防止を考慮し、オンラインでの開催となりました。

【日時・会場】 ◇2021 年 3 月 5 日(金)10:00～15:35
◇開催方法：オンラインによる開催(ZOOM ウェビナー)
※全体討論等において、質疑や意見等が可能です。

■募集人数・対象
・ 80 名程度 ※定員になり次第しめきります。 ・建設系 CPD(建設コンサルタンツ協会)単位付与プログラム
・ 対 象：自治体職員、市民・住民、学識者、学生、コンサルタント職員など川づくりに関心の高い方
・ 参加費(無料)

【主なプログラム】 ＊時間等一部予定、敬称略

10:00	・開会挨拶	
	・主旨説明 山道 省三(NPO 法人全国水環境交流会)	
10:05	・話題提供 「河北潟の課題と将来構想」	高橋 久(NPO法人河北潟湖沼研究所)
	「河北潟の管理について」	室谷 祥大(石川県土木部河川課)
10:45	・講座 1 「グリーンインフラとしての河北潟」	上野 裕介(石川県立大学)
11:25	・講座 2 「包括的再生と河北潟の将来像」	菊地 直樹(金沢大学)
12:05	休憩	
12:55	・講座 3 「地域づくり、循環、能登の事例」	森山 奈美(株式会社 御紋川)
13:35	・講座 4 「新潟市鳥屋野潟での『潟展(がってん)』プロジェクト」	相楽 治(NPO 法人新潟水辺の会)
14:15	休憩・準備	
14:25	・全体討論 (60 分)	
15:35	・閉会	

【お申し込み】 ＊メールかファクシミリで、下記内容を事務局までお申し込みください。

お名前	※CPD 受講希望者はお名前の前に○印をご記入ください
ご所属	
連絡先(登録アドレス)	E-MAIL (必須) TEL　FAX

【事務局】 NPO 法人全国水環境交流会
ﾌｧｸｼﾐﾘ：03-5772-1608　E-mail：mizukan@mizukan.or.jp
℡ 03-3408-2466
〒150-0001　東京都渋谷区神宮前 1-20-14 神宮村 301

河川基金 公益財団法人 河川財団による河川基金の助成を受けています。

＊“いい川”づくり研修会では、多自然川づくりの普及の一環として下記図書を基本のテキストとして開催しています。この機会に是非お求めください。発行元(公益社団法人 日本河川協会)HP：http://www.japanriver.or.jp/publish/book/tashizen_3.htm
『多自然川づくりポイントブックⅢ』(多自然川づくり研究会編、2011)　本体 2,315 円＋税

「河北潟の課題と将来構想」 10:05～

高橋　久（NPO法人河北潟湖沼研究所）

河北潟と干拓の歴史について紹介し、とくに大きく環境が変化した点をとりあげ、その問題点について説明しました。金沢港を作るうえで開削した大野川河口部の変化が河北潟全体に大きくかかわったこと、海の水が入りこむ汽水湖だったことから二枚貝、ゴカイ類がたくさん生息し、水の浄化にも役立っていたこと、湿地性の生きものがすめなくなっており、現在の淡水化された河北潟は、環境基準を満たすことのできない農業用水となっていること、若い人たちの河北潟へのつながりが少ないことなど具体的に紹介するとともに、流域全体をみた長期的総合的ビジョンの必要性を述べ、河北潟湖沼研究所のビジョンを説明しました。持続可能性のある地域をつくるために行政も含めて考えてほしいことが伝えられました。

「河北潟の管理について」 10:33～

室谷祥大氏（石川県土木部河川課）

河北潟干拓事業について説明され、河北潟の近年の水害について紹介するとともに、干拓により治水機能が低下したこと、利水にも使用され、複雑なため、河北潟連絡協議会を設置して連携して日常的な管理、定期的なパトロールを実施しており、水害の軽減につながっていることが伝えられました。堤防の沈下については、沈下を前提に計画されており、堤防の嵩上げを実施して必要な高さを確保していること、河北潟は風が強いことから、浸食されやすく、護岸の老朽化が著しい所は補修していることが伝えられました。樹木が倒れた時に堤防の支障になる場合があることから、堤防に生えた樹木は伐採していること、管理上支障となる草木は除去する方針が説明されました。河北潟には多くの動植物が生息し、ヨシ原が重要であるとの認識にあり、ヨシやアサザ、水質改善に向けたいくつかの取り組みが紹介されました。

「グリーンインフラとしての河北潟」　10:45～
上野祐介氏（石川県立大学）

九州北部豪雨の様子が写真で紹介され、インフラの老朽化、雨の降り方が局地的、集中的、激甚化したことが述べられ、人工が減っていく中で費用が掛かることの問題点をとりあげ、自然が持つ多様な機能や仕組みを活かしたグリーンインフラの必要性について述べられました。また自然保護との違いとして、グリーンインフラのゴールは自然を活用した豊かな社会にあることが伝えられ、河北潟のグリーンインフラとして、大雨の時にわざと溢れさせる利根川の遊水地や刈谷田遊水地を例に、防災と農業生産を両立する仕組みを紹介しました。

「包括的再生と河北潟の将来像」　11:24～
菊池直樹氏（金沢大学）

コウノトリの野生復帰の仕事を13年ほど経験し、河北潟にコウノトリが飛来しており、豊かな生態系や農業発信に活用できるのではないかと期待していることが伝えられ、国レベルで知識と技術を変えていく包括的再生、人と自然の関りの再生、経済効果について述べられました。「生きもの元気米」の6名の生産者からヒアリングして興味深かったところとして、生きもの元気米に参加して農作業や収量があまり変化していない点をとりあげ、コウノトリ米との違いを伝えました。河北潟の将来像にむけて、自然の多機能性の活用とインフラの市民化、協働と合意形成について説明いただきました。

「地域づくり、循環、能登の事例」　12:55～
森山奈美氏（株式会社御祓川）

七尾の町づくりをしたいと取り組みをはじめたこと、御祓川沿いでの古民家の再生、まちづくり会社として能登の事業者をサポートする中間支援をおこなっていることが伝えられ、川の活動から学んできたことが述べられました。人々の関心を集めるにはおいしいものと楽しいことが大事で、川が汚れているとなかなか人が集まらなかった経験が伝えらえました。地域の課題をどう解決する

かに取り組んでこられ、地域を再生するためには、経済を回していくことが大切であると述べられました。

「新潟市鳥屋野潟での『潟展（がってん）』
相楽　治氏（NPO法人新潟水辺の会）

子どもたちの湖上体験、鳥屋野潟を食する会、空芯菜を水耕栽培するための筏づくりなど、市民運動のおもしろい取り組みが映像とともに紹介されました。潟でのあそびが、潟の再生や発展につながることが期待されます。

全体討論では、話が盛り上がり、30分ほど終了時間が過ぎました。質疑応答では、ゴミについてどのような認識・意見がありますかとの質問をいただき、河北潟では湖岸にゴミが多いことから、年に一度の市民参加によるクリーン作戦だけでなく、河川や湖岸で工事される際に事業者にゴミ拾いを義務付けることはできないかと石川県に質問させていただきました。

講演者含めて100名が参加し、42件のアンケートの回答をいただきました。そのうち34件の方は企業に所属する方からの回答でした。アンケートには、オンライン開催が良かったという意見が多く、全体的に非常に良かったとのご感想をいただきました。河北潟の状況がよくわかったとのコメントもいただきました。もう少し参加者との討論の場もほしかったとのご意見もありました。

2020年に開催された“いい川”づくり研修会・近畿において、河北潟での問題に耳を傾け、開催まで導いてくださったＮＰＯ法人全国水環境交流会の山道省三さん、堺 かなえさんには大変お世話になりました。（文：川原奈苗）

『河北潟湖沼研究所潜入記』
～河北潟湖沼研究所で学んだこと②～

大藪愛紗

2021年2月～3月に、河北潟湖沼研究所でボランティア/インターンという形で、活動に参加したなかで、学んだり、新鮮に感じたことなどを潜入記としてまとめました。（前号vol.26-3の続き）

活動２　河北潟の野鳥調査について

野鳥の調査活動は外で行われ、私は外の活動が大好きなため、心に残っています。具体的に行ったことは、河北潟の幾つかの防風林帯を車でめぐり、そこに20分ずつ滞在しながら、鳥の声や姿を観察し、どの種類の鳥がどれくらいいるのかを数えるということです。この活動でもたくさんのことを学んだので、特に新鮮に感じたことを書きます。

第一に、カモの生態について学び、私のもっていたカモのイメージと全く違ったので、とても驚きました。私は、川や湖でカモをよく見かけたので、カモは小魚やプランクトンのような微生物を食べているのだと思っていました。しかし、野外調査中に川原さんから教えていただいたことは、カモは実は夜行性で、若い草を好むのだということです。種類にもよりますが、なんと、カモは主に草食だったのです。驚きました。また、鳥目という言葉からも連想されるように、多くの鳥は暗くなったら見えなくなると思っていましたが、カモが夜行性だということにもとても驚きました。私が可愛いと思っていたカモですが、実はこの夜行性という特徴と、若い草を好むという特徴から、河北潟の酪農農家さんの牧草や麦を食べることがよくあり、鳥害の原因にもなっているようです。私の知らないカモの一面を知るきっかけになり、とても学びが深まりました。

第二に、防風林帯の意義について学びました。防風林帯は風を遮るだけでなく、鳥の生態系にとって大事な役割を担っているのだと学びました。例えば、小さい鳥は開けた場所を飛ぶと、肉食の鳥に狙われるため、背丈の高い草や木々の間を飛んで移動するようなのです。また、防風林帯の木々の実や、花の蜜が鳥の餌となっていることも想像がつきます。そのため、防風林帯は鳥の生態系の一部となっているのだとわかりました。

次に、この活動をして、特に楽しかったことを書きます。たくさんの鳥を見たり、その鳴き声を色々と聞くことができたことはとても楽しかったです。私はまだ、たくさんの鳥の鳴き声を聞き分けることはできないのですが、かわいい声をたくさん聞けたので、良かったです。一緒に調査に出かけた川原さんは、鳥の鳴き声や、一瞬その姿を見るだけで、すぐにどの鳥かわかっていたので、すごいと思いました。この調査をしている間には、鳥がなかなか姿を現すことがなく、車でしばらく待機するということもありました。しかし、その時間も、河北潟の自然を眺めたり、外の空気を吸ってリフレッシュできたりし、とても有意義に感じた時間でした。

最後に活動を通して考えたことを2点書きます。

まず、この調査を通して、鳥の調査が社会にもっと広がることが今後理想的だと考えました。鳥の調査では、一箇所の防風林帯に20分滞在し、10ほどの防風林帯を巡ったため、時間が結構かかりました。そのため、環境NPOなどで働いていても、仕事が多いと、この活動を定期的に行うことはなかなか大変だろうと感じました。そこで、私は、愛鳥家の方々や、バードウオッチングが好きな方々にデータ集計に協力していただければ、その方達にとっても楽しいし、働いている人々にとっても活動負荷の軽減になると考えました。将来的には、市民を巻き込んだ環境のデータ集計ができればいいと思いました。

次に、防風林帯の整備についてです。私の個人的な意見としては、私たちが巡った防風林帯はどれも規模が小さく、幅20mほどの防風林帯で本当に風をさえぎることができているのかな、と疑問を感じました。また、防風林帯はそれぞれ孤立しており、連続性がなかったため、鳥の移動場所としての効果にも疑問を感じました。そのため、河北潟の防風林帯を今後どんどんと広げていくということが現実的に難しくても、例えば、その幅を拡げたり、その長さを少し長くしたり、実をたくさんつける木を導入したりして、鳥の多様性を上げることができるのではないかと考えました。私が調査を行った時期は、冬だったため木に葉っぱはなかったのですが、防風林帯をきれいに整備すると、きっと自然豊かな風景が一層極まって、河北潟の景観にも豊かさが増すのではないかと考えました。

活動３　Web 会議・シンポジウム

私は、河北潟湖沼研究所での活動期間中に、4つのWebイベントに参加させていただきました。4つのうちの2つがシンポジウムで、1つは自然再生協議会全国会議という会議、そしてもう1つは河北潟湖沼研究所の定例会議でした。また、シンポジウムのうちの1つでは、発表する機会までいただき、とても嬉しく、またやりがいを感じました。

これらのイベントに参加しての感想を３つ述べます。

まず、自然再生協議会全国会議についてですが、このイベントは全国各地の環境NPOや団体の活動取り組みを聞くきっかけになり、とても興味深かったです。地域によって、自然の形態も違うし、直面している問題も違うということがわかり、それぞれの地域のことを知れてよかったです。例えば、林の表土の流出や、干潟の埋め立て、農地の宅地化、家庭排水による水質悪化、コンクリートの護岸工事、外来種の流入など、問題を起こしてしまっている原因も多様だし、またそれぞれの地域が誇る自然も、サンゴ礁から湿原、草原、森林など多様なのだとわかりました。このように違う環境で活動をしている方々のお話を一気に聞くことができたという点と、普段はそれぞれ活動しているこれらの団体を全国会議という形で連体感でつなぐことができるのだということを感じ、とても良い学びでした。

2点目は、河北潟湖沼研究所の定例会議についてです。あまり堅い雰囲気ではなく、話に参加しやすいような雰囲気の中行われていたように感じました。会議には、私が研究所の事務所では一度もお会いしたことがない方々も参加していらっしゃり、湖沼研究所が実は多くの方によって運営されているのだということを実感できました。野外での鳥の調査や水田での活動、生物の採取や同定といった自然や環境と直接関わる仕事だけではなく、研究所の運営といった事務的な活動も行われているのだということを知ることができました。

3点目はシンポジウムについてです。シンポジウムには、発表者としても視聴者としても、多様な背景の人が参加していたため、意見の交流にとても良い場になっていると感じました。私の印象に残っている参加者の方で、あるレストランのチェーン店の方がいたのですが、環境NPOや環境の専門家、また、それについて興味のある人などだけではなく、違う業種の人も参加されていたことに、とても新鮮味を感じました。また、シンポジウムの広告のチラシがとても可愛かったことについて、視覚的にも人を惹きつけ、イベントの認知度を向上することは、イベントを開催する主催者として大事なのだと感じました。シンポジウムで発表する際は、とても緊張したのですが、発表する経験を積むことができ、とても感謝しております。（次号につづく）

コウノトリの人工巣塔

河北潟干拓地にコウノトリの人工巣塔が建ちました。昨年、日本コウノトリの会より河北潟湖沼研究所に、河北潟干拓地におそらくつがいであろうコウノトリ2羽が頻繁に飛来しているので、繁殖のための人工巣塔を設置したいとの相談があり、河北潟干拓土地改良区に打診したところ、積極的に協力いただけることになり、候補地を選定していたものです。候補地には地主の協力のほか、他の野生動物、特に猛禽類の生息状況等に配慮する必要があり、慎重に地点を検討した結果、干拓地の湖東に無事に設置されました。

プロボノチーム河北潟

この度、認定NPO法人サービスグラントが行っているふるさとプロボノの支援を受けて、現在進めている流域ツーリズムの分析と活動の進展のための検討を行いました。10月から1月まで、全国から手を挙げていただいた5名の方に、プロボノとしてこの取り組みを支援していただきました。メンバーのみなさまには、2回または3回河北潟に来ていただき，とても参考となる成果報告書をいただきました。3月には河北潟湖沼研究所が主催するシンポジウムで成果のご報告をいただきました。

河北潟野鳥観察会

2021年1月31日（日）に河北潟野鳥観察会が開催されました。干拓地ではツグミやトビ、メタセコイアの梢にノスリ、シジュウカラなどが観察され、その後、マイクロバスと車に分かれて河北潟の広範囲を周回しました。河北潟野鳥観察舎では、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、ハシビロガモ、ミコアイサ、カイツブリ、カンムリカイツブリ、ハジロカイツブリなどがみられ、こなん水辺公園ではミヤマガラスの群れ、水田ではコハクチョウ、タゲリの群れなど、32種類が1時間半ほどで確認されました。今日は少なかったとの声も聞かれましたが、色々な野鳥の観察を楽しむことができました。本観察会は、多くの野鳥が生息する河北潟の大切な環境を守ることにつながればと、日本野鳥の会石川、森の都愛鳥会、グリーン･アース 農地･水・環境保全組織、ＮＰＯ法人河北潟湖沼研究所が連携して実施しました。

水辺の生物多様性ホットスポットをさがそう観察会

2021年3月20日（土）に河北潟の東に流れ込む田んぼの水路において、観察会をおこないました。ギンブナ、ドジョウ、ヌマチチブ、クサガメ、テナガエビ、スジエビ、カワニナなどが確認されました。本観察会では、田中賢良さん、岡本 毅さんを講師にお招きし、井上の荘公民館さんの協力をいただいて実施しました。

編集後記

九州の筑後川はとても雄大で美しい川でした。宿泊施設近くの居酒屋さんで有明海の幸を堪能させていただきました。でも漁獲量は減っており、獲れる種類も変わってきているとのことです。筑後川流域の取り組みが環境改善につながりますように。（N）

かほくがた Vol.26-4
発行／NPO法人河北潟湖沼研究所
令和3年5月15日
〒929-0342 石川県河北郡津幡町北中条ナ9-9
電話076-288-5803 FAX 076-255-6941
ホームページ http://kahokugata.sakura.ne.jp
E-mail info@kahokugata.sakura.ne.jp